

ダイ・ハード4.0

2007(平成19)年6月19日鑑賞(試写会・リサیتالホール)

★★★★



監督＝レン・ワイズマン／出演＝ブルース・ウィリス／ジャスティン・ロング／ティモシー・オリファント／マギー・Q／クリフ・カーティス／ケヴィン・スミス／メアリー・エリザベス・ウィンステッド (20世紀フォックス映画配給／2007年アメリカ映画／129分)

第2章

男臭さ満開！

……己の不運を嘆きつつ、肉体と知能の限りを尽くして悪と闘う不死身の男マクレーン刑事が復帰した！ 今度の敵はサイバーテロを仕掛けてきたコンピューターの天才だから、アナログ人間のマクレーンだけでは太刀打ちできないもの。そこで、彼の相棒となる若者は……？ アジアの名花マギー・Qが悪役となり、中盤でアッサリ(?)死んでしまうのはもったいない限りだが、格闘シーンやアクションシーンは見どころいっぱい！ 52歳のブルース・ウィリスが、60歳で『ロッキー・ザ・ファイナル』(06年)をつくったシルベスター・スタローンと同じように、還暦で『ダイ・ハード・ザ・ファイナル』をつくるまで、あと何作の続編が……？

52歳はまだまだ……

『シックス・センス』(99年)や『アンブレイカブル』(00年)での渋い演技や、劇画タッチの映画『シン・シティ』(05年)での引退間近の中年刑事役(『シネマルーム9』340頁参照)など、演技の幅を広げているのがブルース・ウィリス。しかし、彼にはやはり出世作となった『ダイ・ハード』(88年)での運の悪い刑事ジョン・マクレーン役がお似合い！

柳の下のどじょうは何匹でも追い求めるハリウッドの方針によって(?)、たて続けに『ダイ・ハード2』(90年)、『ダイ・ハード3』(95年)が作られたが、この『ダイ・ハード4.0』によって前作から12年ぶりにジョン・マクレーン刑事がスクリーンに復帰することに。ブルース・ウィリスは1955年生まれだから、第1作の時は33歳だったが、それから19年後の2007年、彼は既に52歳。しかし、『ロッキー』シリーズ

のシルベスター・スタローンが『ロッキー・ザ・ファイナル』（06年）をつくったのが60歳の時だから、52歳のブルース・ウィリスはまだまだ……。

ハイテク時代に取り残されたアナログ世代であることを自覚しつつ、オレ流の過激なアクションを次々とこなす姿は、まさに中年の星！

監督はブルース・ウィリスのオファーによって

『ロッキー』シリーズは主演のシルベスター・スタローンが自ら監督したが、ブルース・ウィリスクラスの俳優、また『ダイ・ハード』クラスのヒット作になると、誰がその映画を監督するのかについては、主演するブルース・ウィリスの発言力が大きいよう……。

プレスシートによると、『ダイ・ハード4.0』を1973年生まれの若手レン・ワイズマンが監督することになったのは、ブルース・ウィリスがワイズマン監督の『アンダーワールド』シリーズを観て、その物語作りと技術に着目し、SFファンタジーの世界を超えた能力があると見込んだためらしい……。

私は前3作を公開時に劇場で観ておらずテレビ放映で観た程度だが、たしかにこの『ダイ・ハード4.0』におけるアクションは、前3作を大きく超えていることはたしか。そしてそれは、このレン・ワイズマン監督の手腕によるところ大……？

もっとも、映画作りにおいて主演俳優と監督との力関係が難しいのは、かつて黒澤明監督の『影武者』（80年）に主演するはずだった勝新太郎が監督との意見対立によって途中降板し、仲代達矢に交代したケースを見れば明らか。そんな目で見ると、さてこの映画では、その力関係に問題はなかったのかな……？

7月4日 vs. 2月11日そして秋のG.W. 構想は挫折

7月4日がアメリカの独立記念日であることは『7月4日に生まれて』（89年）などの名作があるためか、アメリカ人はもとより日本人もよく知っている……？ しかし、アメリカの独立記念日を知っていても、日本の建国記念日が2月11日であることを知らない日本人が案外多いのでは……？

日本には春のゴールデンウィーク（G.W.）なるものが昔からあった。これは4月29日（1988年までは天皇誕生日、2006年まではみどりの日、その後昭和の日）、5月3日の憲法記念日、5月5日のこどもの日と祝日が飛び石で続いたため、それに土日が

うまく連続すれば長期休暇が取れることになり、高度経済成長時代における働きバチの日本人が楽しみにしていたもの……。

また1985年の祝日法の改正によって5月4日が国民の休日（みどりの日）とされ、さらに、2005年の祝日法の改正により、休日の名称および振替休日の規定が変更され、憲法記念日やみどりの日が日曜日と重なった場合、こどもの日の翌日が振替休日になり、その分連休が延びることとなった。そのため企業によっては休日が10日間前後になるゴールデンウィークが誕生することになった。

それに味をしめて（？）今国会では、公明党の提案による秋のゴールデンウィーク構想が取り沙汰された。それは体育の日（10月の第2月曜日）と勤労感謝の日（11月23日）を文化の日（11月3日）の前後に移動し、秋の大型連休を作るという案だったが、勤労感謝の日が皇室神事の新嘗祭（いなめさい）にあたること、したがって祝日にしたことの意義を無視し、大型連休にするため便宜的に日を変えることには合理性がないという自民党の反発が大きく、挫折することに……。

独立記念日に「ファイアーセール」が……？

アメリカ合衆国の首都はワシントン DC。そのワシントン DC の FBI 本部にあるサイバー犯罪部に異変が起こったのは、独立記念日前夜のこと。交通、通信、原子力、水道などあらゆる全米のインフラを監視するシステムに、何者かがハッキングを仕掛けてきたのだった。この部署の責任者ボウマン部長（クリフ・カーティス）は、FBI のブラックリストに載っているハッカーたちの一斉捜査を部下に命じたが……？

私がこの映画ではじめて知ったのは「ファイアーセール」という言葉で、これは「国のインフラに対する組織的なサイバー攻撃を意味するハッカーのスラング」とのこと。アメリカの独立記念日の日に、コンピューターで監視されているアメリカ合衆国全土の電気が消え、交通、通信から水道、ガスに至るまですべてのインフラがサイバーテロリストたちの支配下に置かれるということは、まさに国家そのものの乗っ取り……？ そんな大胆な計画を立案した奴は一体ダレ……？

敵は身内にあり！

こんな国家乗っ取りに匹敵するサイバーテロを仕掛けた首謀者はガブリエル（ティモシー・オリファント）。そこで注目されるのは、彼は一体どんな人物か、またどん

な動機で何を狙っているのかということ。ストーリー展開の中で明らかになっていくのは、このコンピューターの天才ガブリエルは元FBI内部の人間で、全米のインフラを監視するシステムの不備を指摘し、その改善を提案したにもかかわらずそれを無視されたため、FBIを去っていった人物だということ。したがって、ガブリエルはFBIのインフラ監視システムとその弱点をすべて知り尽くしている人物だから、そのシステムにサイバーテロを仕掛けることは、彼にとっては一種の知能ゲームであるうえ、絶対負けることのないもの。こりゃFBIにとっては、何ともマズイことに……。

他方、ガブリエルが、本気でアメリカ合衆国全土を乗っ取り大統領に就こうと思っているわけではないことは、ある意味でひと安心……。つまり、現代社会の犯罪にふさわしく、彼が要求するのはカネ！ もっとも、これだけ仕掛けたのだから、その要求する金額がハンパでないのは当然。ホントにガブリエル一味を逮捕し、壊滅できなければ、アメリカ合衆国が彼らに支払う金額は、ベトナム戦争やイラク戦争の戦費以上になってもやむをえないかも……？

ちなみに『亡国のイージス』（05年）で、護衛艦いそかぜを乗っ取り、米軍が極秘裏に開発したわずか1リットルで東京中の生物を死滅させる威力をもつ“GUSOH”なる特殊兵器の存在を明らかにすることを要求した、中井貴一扮する溝口三佐ことヨンファも、れっきとした自衛隊員だった。このことから明らかなように、「敵は身内にあり！」ということをくれぐれもお忘れなく……。

不運な男、ツイてない男はいつも……？

『ダイ・ハード』シリーズにおいてマクレーン刑事がヒーローとなったのは、「不死身の男」というキャラによるもの。しかし同時に、マクレーンには「運の悪い男」というイメージがつきまとい、いつも「なぜ俺がこんな目に……」と己の運の悪さ、ツキのなさをも嘆いているという人情味があり、それが彼がすべてのアメリカ国民から愛されるヒーローになった秘訣……。今回もそんな己の運の悪さを嘆くシーンが冒頭から……。

ニューヨーク市警総合テロ対策班のマクレーン警部補が今ニュージャージー州の大学にいるのは、別れた妻との間の一人娘ルーシー（メアリー・エリザベス・ウィンステッド）に会うため。「この父親にして、この娘あり」ということが後半になって次第にわかってくるが、ボーイフレンドと一緒にのところに突然現れた父親に対してルー

シーは反発し、すげなく父親の前から立ち去ってしまったから、マクレーンが面白くないのは当然。そのうえ、そんな時に限ってイヤな仕事を言いつけられるのが、不運な男のツキのなさ……？ マクレーンは「ニュージャージー州内に住むマット（ジャスティン・ロング）というハッカーの身柄を確保し、ワシントン DC の FBI 本部に連れて行け」と命令されたため、仕方なくマットのアパートを訪れたが……。

マットの大抜擢は……？

『ダイ・ハード』は本来ブルース・ウィリスの一枚看板だが、『ダイ・ハード4.0』では、マクレーンが逮捕すべき対象だった、サイバーテロの協力者であるハッカーのマットが大きな役割を果たしている。

マクレーンが不運な男だということは、簡単な仕事だったはずのマットの拘束中、ガブリエルの命令を受けた傭兵部隊の襲撃を受けたことによってもわかる。マクレーンは、何とかその襲撃を逃れたものの、ここからはマットを守ってワシントン DC まで連れて行くことがマクレーンの大切な任務に……。したがってこれ以降、マクレーンと共に大活躍するマットの姿は、まるでかつての『悪名』シリーズにおける、勝新太郎扮する朝吉親分と田宮二郎扮するモートルの貞のコンビのようなもの……？

プレスシートには、「ハリウッドの若手有望株として急速に注目を集めており、数多くの新作が待機している」と書かれているが、こんな彼をマット役に大抜擢したのも、ひょっとしてブルース・ウィリスの意向……？

見モノのアクションシーン その1——車でヘリを撃墜

『ダイ・ハード』最大の売りモノは不死身の男マクレーンのアクションシーンだから、この映画でも手を変え品を変えて、アッと驚くアクションシーンが次々と登場する。その第1は、車によるヘリコプターの撃墜シーンだが、そんなことがどうやって可能に……？ レン・ワイズマン監督の工夫による(?)『ダイ・ハード4.0』でのこのシーンは、前半の大きな見モノ……？

見モノのアクションシーン その2——F35戦闘機も……

ハリウッドのアクション映画にはカーチェイスが必ず登場するが、後半最大のハイライトは、マクレーンが運転する大型トラックと F35 戦闘機との対決……？ この

F35戦闘機は、本来マクレーンが追跡しているガブリエルが乗る車を攻撃しなければならないのだが、ガブリエルからの誤導によってマクレーンのトラックにロケット弾を撃ち込んできたから大変。

そうなれば、誰がどう考えても、F35戦闘機の方が強いに決まっているが、複雑に張りめぐらされた高速道路をうまくすり抜けながら、迫ってくる戦闘機をやっつけてしまうところが、さすが不死身の男マクレーン……。ちょっとマンガっぽいものの、手に汗を握るそんなアクションシーンを堪能したいもの……。

この映画でもアジア俳優は……？

最近Jホラーはもとより、中国映画や香港映画のハリウッド進出が顕著になっているうえ、ハリウッド映画でもアジア系の俳優を起用するケースが増えている。『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』（07年）ではアジアの海賊キャプテン・サオ・フェン役に「亜州影帝」チョウ・ユンファが登場し、大きな存在感を示したが、『ダイ・ハード4.0』ではサイバテロの首謀者ガブリエルの恋人マイ役としてアジアビューティーのマギー・Qが登場する。

彼女は父がアメリカ人で、母がベトナム人。そして18歳のときに香港に移り住み、トップモデルから女優へのキャリアをスタートさせ、『M:i:III』（06年）で本格的なハリウッド進出を果たした1979年生まれの若手美人女優。

マイはガブリエルの恋人だが、それ以上にテロ実行のパートナーとして重要な役割を果たしているうえ、マクレーンから「カンフーの女ニンジャ」と呼ばれるほど、蹴り技を中心とした格闘能力の高い女性。したがって、この映画ではその美しさよりも強さを前面に押し出しており、マクレーンとの一騎討ちシーンは前半のハイライト。

しかし、『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』におけるキャプテン・サオ・フェンも途中であっさり死んでしまったため一種のお飾りの扱いとなっていたように、このマイもマクレーンとの一騎討ちシーンであっさり死亡してしまうと、それで「お役御免」とされているから、やはりハリウッド映画ではアジア系俳優の扱いは少し冷淡……？

もう1人、興味深いハッカーが登場！

この映画のプレスシートに「アナログ vs. デジタル」と表現されているように、コ

ンピューターを自由に使いこなし、ハッカー行為さえ自由にやってのけるガブリエルやマットに対して、マクレーンは私と同じようにケイタイメールすらまともに使えない(?) アナログ人間……。ガブリエルによるサイバーテロは大規模なものだから、その一部を知らないうちに手伝われることになったマットがいくら優秀だといっても、それを阻止するだけの能力がないのは当然。そこで、レン・ワイズマン監督が登場させたのは、ワーロック(ケヴィン・スミス)といういかにもコンピューターおたくという雰囲気のおじさん。映画の中で、このワーロックを「ハッカー界のジェダイ・マスター」と形容しているが、まさにそれ……。

こんな男は平常時には何の役にも立たないが、非常時においてその能力が発揮されるもの。わざわざワーロックの元を訪れたマクレーンとマットがワーロックから得た情報は貴重で、それによってやっとマクレーンらはガブリエルの本拠地に迫っていきけることに……。

結末は最初からわかっているとおり……

この手のヒーローもの映画の結末は、最初からわかっているもの。すなわち、悪と闘う主人公が悪戦苦闘しながら、最後には悪をやっつけてめでたし、めでたしとなるはず……。したがって、この手の映画はそこに至るプロセスを、いかに苦しくそして楽しく見せるかがポイント。

そんな視点で見ると『ダイ・ハード4.0』は、サイバーテロというテーマも現実的だし、それと闘うプロセスも実によくできている。ただ、52歳のブルース・ウィリスが若い時以上のアクションをこなしているものの、アナログ派の彼にはサイバーテロと闘う助手(相棒)が必要となったのは、時代の流れとしてやむをえないもの。

マクレーンはあくまで己の不運をボヤきながら肉体派で進まざるをえないが、予想される「パート5」では1人で自立して闘うのか、それともやはり相棒が必要なのか、それは登場してくる敵次第……。さて、シルベスター・スタローンと同じように、ブルース・ウィリスが還暦になるまで務めあげるとしたら、続編はあと何作……？

2007(平成19)年6月20日記